今日のイラスト 459　「 イラストでたどる萩往還㉙ 脱隊諸士招魂碑」　　古谷眞之助

イラストでたどる
萩往還
㉙ 脱隊諸士招魂碑

奇兵隊というと幕末のヒーロー的イメージが強いが、戊辰戦争から凱旋した彼らを待っていたのは悲惨な運命だった。明治三年、藩政府は正規軍再編のため隊士約五千人のうち約半数を論功行賞もなく解雇してしまう。しかも、解雇された者のほとんどは武士階級ではない平民出身者だったという。解雇された彼らは藩政府に対して反乱の狼煙を上げた。

反乱軍は一時優勢に立つが、新政府の桂小五郎らは急遽山口に帰り、彼らを「尾大の弊」として徹底的に鎮圧・断罪した。その結果、反乱の首謀者の多くがここで斬首されてしまう。萩藩の歴史の暗部とも言える事件である。明治政府が彼らのために招魂碑を建てたのは、それから実に23年後のことだった。

文・イラスト＝古谷眞之助

萩往還の中でも、特にここは思い入れがある場所である。過日８月６日には友人Ｉさんと二人でこのエリア一帯の草刈りを行ってきた。このエリアは、私が所属している「大内倶楽部」が山口市から管理を委託されており、そんなこともあって一年に一度だが草刈りを続けているのである。記憶違いがなければ、確かもう10 年は続けている。ところで、友人Ｉさんは「竹林ボランティア山口」という県内の繁茂し過ぎた孟宗竹を伐採するボランティアグループの確か会長も務められているので、草刈りはおろか、伸びすぎた樹枝の切り倒しもお手のものである。意外にも広場の草は大して伸びてはおらず、私はそこを奇麗に刈りこむことに専念し、Ｉさんには周囲の樹枝をバッサバッサと切り倒していただいた。そして今年も朝６時から１時間余りの作業を無事終えることが出来た。いつもであれば地蔵盆を行うのだが、こんな状況ではそれも出来ない。

思い入れがあるのは何も草刈りをしているからではない。大内倶楽部に入ってこの脱隊事件の存在を知るに至って、それまで単にヒーロー的存在でしかなかった奇兵隊、あるいは幕末の長州藩に対する思いが 180 度までは行かないにしろ、確実に 90 度くらいは変わったからである。長州藩出身者で維新後に功成り名を遂げた明治の元勲たち、あるいは明治新体制、あるいは華族制度という明治時代の絶対主義的機構によってこの事件は隠され、無視され続けたキライがないわけではないと思うのである。事件は戊辰戦争後に凱旋した諸隊の再編成に伴って発生した。そのことは本文に書いた通り。しかし実は脱退した整武隊を中心とする旧隊士がその後長期間に亘って毛利家当主に賞典分配の嘆願を行い続けるが、最終的には突っぱねられ、ついには２度も訴訟を起こしてしまうのである。明治 34 年３月、原告山口町の田中哲夫は、公爵毛利元昭（ 敬親の孫 ）を被告人として東京地裁に「賞典禄引き渡し請求」の訴状を提出した。しかし請求棄却の判決だった。直ちに控訴するも翌年 2 月敗訴。さらに明治 37 年 11 月、今度は山根六左衛門が山口地裁に同様の訴状を提出した。被告人はまたも公爵毛利元昭だった。翌年 4 月には、やはり原告敗訴の判決が出されたため、さらに広島控訴院に上告したが結果は同じだった。以上は県文書館の広田暢久氏の「整武隊訴訟事件」を参考にして書いた。身贔屓で明治維新の明るい面ばかりに目を向けてしまいがちだが、時の公爵毛利公が旧整武隊士から２度も訴えられたという暗い事実も、忘れてはならないと思うのである。（ 2021.8.24 記 ）